

## 台湾における漆工芸に関する調査報告<sup>1</sup>

根本 曠子\*・山田 眞一\*\*

### 要 旨

本調査報告は、台湾の漆工芸に関する調査報告であり、次の二つの部分からなる。ひとつは、教育という視点からみた台湾における漆工芸の歴史と現状に関する部分であり、もうひとつは、若手の漆芸作家を通してみた漆芸の技法に関する部分である。台湾の漆芸は歴史的には中国大陸の福建省の影響を受けてきたが、1920年代以降は日本の漆工芸の影響を色濃く受けている。戦前日本で漆芸を学んだ頼高山氏や王清霜氏らにより日本の漆芸の技法が台湾の漆芸に受け継がれ、現在では台湾の伝統工芸の陶器に漆工芸を取り入れた新たな展開が見られる。

キーワード：台湾、漆工芸、伝統工芸、陶器、頼高山、王清霜

### 1 はじめに

本調査は、本学の漆工芸教育ならびに芸術系の学生に対する中国語教育に資することを目的に、故横山幸文産業造形学科教授と本稿の執筆者の一人である山田が、台湾における漆工芸について調査を行う予定であった。しかしながら、台湾への出発を目前にして横山先生が倒れられ入院されるという事態が生じた。調査を断念することも考えたが、入院先でご家族の方から、横山先生がこの調査のためにいろいろ準備を進められ台湾での調査を楽しみにしておられたことを伺い、横山先生のお気持ちを無にしてはいけないという思いを強くし、当初の予定通り調査を行うことにした。しかし、漆芸について門外漢の山田一人で台湾へ行っても調査はできない。そこで急遽、漆工芸コースの根本曠子教授にお願いし、横山先生に代わって台湾での調査に同行していただくことになった。本稿はその報告であるが、本来ならば「はじめに」の部分は、この調査のための準備を精力的に進められた横山先生がお書きになるはずであった。東京芸術大学の三田村純一助教授を通じて、台湾漆芸協会理事長である頼作明教授（国立台南芸術学院<sup>2</sup>でも指導にあたっている）を紹介していただいたことで、今回の調査が実現したのであるが、それは横山先生がご尽力された結果であり、山田は準備段階においては、ただ具体的な日程の打ち合わせを頼作明氏との間でやりとりしたにすぎない。今回の調査に際しお力添えをいただいた東京芸術大学三田村純一助教授、台湾での調査が実質3日間という短期間であるにもかかわらず、実りあるものになるよう、心温まるご配慮を頂戴した頼作明教授に心よりお礼申し上げますとともに、この調査報告が故横山幸文先生を偲ぶよすがとなればと願うものである。

\* 産業造形学科

\*\* 地域ビジネス学科

## 2 経緯

本調査を行うことになった直接のきっかけは、専攻科で開設している山田の中国語の授業の受講生の中に漆工芸を学んでいる学生がおり、その学生に台湾で出版され中国語でかかれた『漆芸術鑑賞』を読んでやってほしいと、横山先生から頼まれたことにある。しかし、このことは、中国語を専門分野とするものの、漆芸術のことはまったくの門外漢の山田にとっては、にわか勉強で間に合うようなことではなかった。専門用語の辞書的な意味はなんとか理解できても、そこに書かれていることが実感としてしっくり身体に入っていない。台湾の漆工芸の歴史についていくつかの文献をあたってみたが、中国大陆における漆工芸とはまったく異なる歴史を有しているらしく、台湾において実地に調査し理解を深める必要を強く感じた。それと同時に、この機会に高岡短期大学の産業造形学科とりわけ漆工芸コースの教育を台湾の漆芸関係者に知ってもらい、今後の更なる交流のきっかけにできればという思いがわれわれにはあった。

本報告は2つの部分からなる。ひとつは、教育という視点からみた台湾における漆工芸の歴史と現状に関するものであり、もうひとつは、台湾の漆芸の技法に関するものである。前者を山田が、後者を根本教授が分担執筆した。

## 3 日程と調査の概要

調査期間は2002年11月10日から11月14日までの5日間で、ほとんどの行程を頼作明氏とそのお弟子である陳永興氏、李麗卿女史、郝彥生女史、簡寬寬女史たちに案内をしていただいた。おかげでロスがなく、11月中旬にもかかわらず日中28.9度の暑さもさほど苦にもならず滞りなく目的を達することができた。

11月10日(日)

関西空港から空路台北国際空港へ(午後4時15分着)。頼作明氏の弟子である李本育女史の出迎えを受ける。高速長距離バスに乗り台中へ(午後7時半ころ到着)。台湾漆芸界の重鎮頼高山氏(写真右から二人目)、そのご子息で台湾漆芸協会理事長の頼作明氏(写真右端)とその弟子8名とともに会食。頼氏自宅兼台湾漆文化博物館へ立ち寄り、謝藍(婚礼の際、女性が用意する食物を入れる漆器)など台湾の伝統的な漆芸品を見学した後、宿泊場所へ午後11時過ぎに到着。

11月11日(月)

朝8時出発。謝怡音女史(国立北斗家商広告設計科講師で漆芸作家でもある客家人<sup>はっかじん</sup>)の自宅を訪ね、その後、彰化県にある大葉大学を訪問。漆芸コース講師、顧琪君女史から大葉大学のデザイン造形教育について説明を受ける。埔里の王清霜氏宅を訪問(王氏は頼高山氏とともに台湾漆芸界の長老格の大家である)。その後、草屯の台湾工芸研究所を訪問(当初予定になかったが、王清霜氏が連絡してくださり、訪問がなかった)。午後11時過ぎ台中にもどる。



11月12日（火）

朝8時30分出発。頼高山アトリエ訪問。頼作明氏とともに、台中市文化センター訪問（郭国雄文化資産課課長よりセンターの活動について説明を受ける）。頼高山氏とともに、梧棲大甲に住む若い漆芸家の陳文濱および陳鏡、呉淑桜夫妻を訪問。陳氏らは生計を立てるために、創作活動のほか、みやげ物用の陶器を作ったりしている。李幸龍夫妻同席の上昼食、その後清水鎮にある李氏の自宅兼アトリエ訪問。李氏は今台湾で一番売れっ子の作家で、創作活動だけで生計を立てている。3階建ての豪華な建物に凝った家具調度品がさりげなく置かれている。2時ころ李氏邸で頼高山氏とも別れ、新竹へ向かう（午後6時半ころ到着）。新竹県にある大華技術学院を訪問。同大図書館のギャラリーで個展を開いている漆芸作家彭坤炎氏（家業は仏具販売）、雷春鳴氏（大華技術学院東北アジア研究センター主任）、林文珊女史（同大図書館芸文総監）らと歓談。その後新竹県新豊郷埔和村在住の螺鈿作家陳振芳氏の自宅兼アトリエを訪問。午後10時半ころ新竹市内のホテルに到着。

11月13日（水）

朝9時ごろ新竹からタクシーで台北へ出発。故宮博物院、歴史博物館を見学。故宮博物院では日本の漆芸特設展が開かれており、技士の謝金鸞女史より展示品の説明を受ける。歴史博物館では青銅器、唐三彩が多く展示されており、漆芸品は謝藍が数点展示されていただけであった。

11月14日（木）

帰国

## 4 台湾漆工芸の歴史と現状

### 4.1 中国（台湾）漆工芸略史

台湾の漆工芸について述べる前に、中国漆工芸の歴史を概観しておく必要があるので、以下にごく簡単に記しておこう。

新石器時代の早い時期から漆器の製作が始まっていたことは、今から7千年前の浙江省餘姚河姆渡遺跡から出土した漆を塗った木椀により証明される。当時、稲作農耕が行われており、出土文物の中には木椀のほかにも盾や武器の柄、酒器などに漆器が使われていた。ちなみに、これとほぼ同時期の漆器が日本の縄文時代前期の遺跡である福井県鳥浜貝塚で出土しており、漆が中国から日本に伝わったものなのか、別個に利用が進んでいたのかは、まだよくわからないことが多いといわれている。<sup>4</sup>

漆の字は『詩経』<sup>5</sup>にみえるのがもっとも早く、『説文解字』<sup>6</sup>には「漆」の字も収められている。「漆」は象形文字で、「木」の左右にある「はね」は漆の木から漆を採集するときに竹管をつけた様子を示しており、下の「水」は漆の樹液が流れ溜まる様子を表している。「漆」はもともと渭水に流れ込む、陝西省を流れる小さな河の名であり、「漆」を「漆」と書くのは今の字体で古字に代えているのだという。また『書経・禹貢』<sup>7</sup>には、漆糸が兗州（今の河北省東南部から山東省西北部）、豫州（今の河南省および湖北省北部）の貢物として記載されている。

戦国時代（BC403年 - BC221年）は漆の木の栽培が盛んで、北は河北、山東、南は湖北、湖南まで大規模に行われた。莊子（約BC369年 - BC286年）<sup>8</sup>はかつて漆園吏であったことが知られているが、このことは、漆器製作と生産がすでに政府の管理制度下にあったことを示しており、当時の貴族社会では、食器、武器、家具、楽器、祭器などの器物に漆が使われていた。とりわ

け楚では盛んであったことが出土文物からわかる。

湖北省からは戦国、秦（BC221年 - BC202年）（雲夢県睡虎地）、前漢（BC202年 - 7年）（江陵鳳凰山）時代を通じて、楚墓や漢墓の出土文物の中に多量の漆器が出現している。楚墓にしばしば見られる「鎮墓獸」と称される墓守の立像彫刻は、二本の角があり、体中が鱗で覆われ、舌が臍まで伸び、『山海経』<sup>9</sup>に記された奇獸を連想させる。また、湖南省長沙の馬王堆漢墓出土文物からは当時の漆芸の技巧が十分にうかがえる。漢代においては、漆芸の工程が細かく分かれていることが、ロンドン大英博物館所蔵の「元始四年漆耳杯」に刻まれている銘文からうかがうことができる。

なお、三国時代（220年 - 280年）の蜀漢では下駄を履くことがはやり、蜀では女性が嫁ぐとき、下駄に漆絵を描いたという。

六朝時代（4世紀末 - 6世紀末）になると、仏教が盛んになり、夾紵による仏像が多く作られるようになる。

唐代（618年 - 907年）は中国芸術史における黄金時代であり、漆芸においても飛躍的な発展を遂げた。唐代になると金銀平胎が盛んになり、奈良正倉院の「金銀平文琴」に見られるように、遣唐使を通じ日本にも伝わっている。この時期は螺鈿の技法が大きく発展した時期でもあったことは、正倉院蔵「五弦琵琶」「阮咸」等からもうかがい知ることができる。また、754年に入京した揚州大雲寺の鑑真和尚<sup>わじょう</sup>が、日本に夾紵の技法を伝えたといわれる。なお、彫漆も唐代に新しく創造された漆芸の技法である。

宋（960年 - 1279年）、元（1206年 - 1368年）代になると、漆は日用器皿のほか建築にも使われるようになった。宋代になると彫漆、螺鈿、描金、彫填、百宝嵌などが盛んになり、漆芸の表現の可能性が追求された時代であったといえる。元、明（1368年 - 1644年）代以降は彫漆のうちの剔紅（堆朱）が広く行われ、近代における福州芸師所に受け継がれている。

明、清（1644年 - 1911年）代には支配階層が彫漆を好み、宋、元代のような器皿類にとどまらず、屏風や大型の椅子机、たんす、さらには建築にも彫漆が好んで用いられた。漆画、金漆、彫填、堆漆などに新しい技法上の進展が見られた時代である。

こうした歴史的な流れを背景に、広大な中国大陸各地にはそれぞれ地方による特色がある。たとえば、北京の彫漆（堆朱）、福州の脱胎（夾紵）、寧波の螺鈿、揚州の百宝嵌、貴州の皮胎、描金というように歴史的・地理的要因により地方による漆芸の特色があり、現在に至っている。

#### 4. 2 台湾における漆工芸とその伝習

上に見た中国における漆芸の概略から、台湾における漆芸は対岸の福州から伝わり、大陸の影響を強く受けているだろうと考えがちだが、実は、台湾における漆芸には日本が大きくかかわっているのである。以下に、台湾における漆芸について、その伝習を中心に略述する。<sup>10</sup>

##### 4. 2. 1 漆の植樹

1895年の日清戦争後、台湾は日本に割譲された。漆器は当時の日本人の生活必需品でありその需要が増加し、元来漆の木がなかった台湾を漆器の産地とするため、1921年に殖産局の技師であった山下新二が、ベトナムから台中州能高郡魚池庄蓮花池で漆の木を植えたのが、台湾における漆の植樹の始まりである。当時、日本の漆業界の指導的立場にあった齊藤株式会社（本社大阪）は1929年5月に漆林部研究所を設置し、アンナン（安南）漆の造林をおこなった。台湾の

漆はアンナン産よりも乾燥が速い良質の漆で、日本の漆業界で珍重され、齊藤株式会社は1940年に新竹に台湾殖漆株式会社を設立した。このことにより台湾に初めて生漆生成の観念が生まれ、漆工芸技術が精密になったといえる。台湾生漆の生産は、初期は苗栗銅鑼で造林と生漆の採取が行われていたが、1950年代以降は、埔里に中心が移り1960年代には台湾の漆生産の90パーセント以上を占めるようになった。

#### 4. 2. 2 漆工芸の伝習

台湾における漆工芸技術の伝承は、日本統治時代の末期のごく短い時間における正式な伝習にみられるのみで、その主なものは2つある。ひとつは1928年に設立された台中市立工芸伝習所（後に私立工芸専修学校）で、もうひとつは日本の理研電化工業株式会社（静岡県）が1941年に新竹市に設立した理研株式会社である。

##### 4. 2. 2. 1 台中市立工芸伝習所

台中市立工芸伝習所は、台中市政府勸業科が台湾で漆芸技術の伝習の必要性を感じ設立したもので、東京美術学校（現東京芸術大学）卒の山中公氏が主催した。創立4年後の1932年には私立山中工芸専修学校と改め、政府が経営費用の一部を補助していた。このとき学校は1921年に成立した山中工芸美術漆器製作所に付属しており、学生の作品も工場の製品とされたが、高級品は工場で作られた。同校への入学者は毎年5～10名程度であったが、卒業生には頼高山氏（1921年生まれ）と王清霜氏（1922年生まれ）がいる。両氏は卒業後1940年にともに校長推薦により東京美術学校で和田三造氏に絵画を、河面冬山氏（芸術院会員）に漆芸を学んでいる。また、頼氏、王氏より数歳年配でやはり台湾漆芸界の長老である陳火慶氏は山中工芸美術漆器製作所の徒弟出身である。

工芸専修学校は、2. 2. 8事件<sup>11</sup>と絡んで、第二次大戦終結後まもなく解散してしまった。

##### 4. 2. 2. 2 理研株式会社

日本の静岡県にある理研電化工業株式会社が設立した、技術の伝習と生産工場を合わせたもので、一種の徒弟式の生産教育が行われていた。同社は沖縄県工業指導所の漆部主任であった、東京美術学校卒業生の生駒弘氏を工場長に招いて、漆器技術者の養成と漆器の生産にあっていた。工場の従業員は120人前後であり、私企業にもかかわらず、台湾総督府は毎年当時の金額で20万円の補助金を出していた。理研株式会社は木胎漆碗の生産が主で、技術は琉球堆錦漆芸を受け継ぎ、多くの台湾の漆器技術者を養成した。

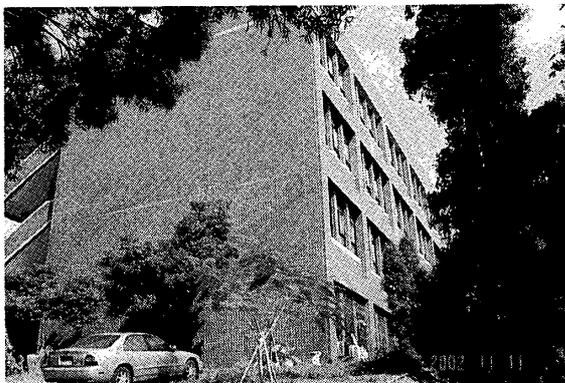
第二次大戦後、日本の技術者も引き上げそれまで培った技術の伝承はとだえてしまい、同社は台湾工鉦公司ガラス分公司（会社）が摂取したが、1949年には営業活動を停止し、現在は新竹工業高校のキャンパスになっている。

#### 4. 3 大葉大学デザイン芸術学部

以上、台湾漆工芸の歴史を大まかに追ってみたが、われわれは現在の台湾漆工芸教育に対する知見を得るため、台中にある大葉大学デザイン芸術学部を訪れた。台湾の高等教育機関における漆芸教育の中心は、先にのべた歴史的な理由から台中が中心であるといえ、現在の台湾漆芸教育の実態を知る上で、また本学における漆工芸教育と比較する意味においても、大葉大学を訪れ、

教員や学生と交流できたことは今回の調査にとって意義深いことであった。大業大学は台湾中部の彰化県に位置し、1990年3月に創設された私立大学であり、造形芸術学科のあるデザイン芸術学部のほか、工学部、管理学部、外国語学部の4学部と共通教育センター、教職課程センターからなる。「理論と実務」の重視を建学の理念にかかげ、指導教官制と産学結合を通し、「創意と教養」を備えた職業人の養成を教育目的としている。彰化県大村郷の山麓に広がるキャンパスには、学部ごとの真新しい校舎と教職員宿舎、学生宿舎も完備され、キャンパス内は巡回スクールバスが定期的に走っている。学生数は2002年度を例にとると、工学部(5056名)、管理学部(4117名)、デザイン芸術学部(1134名)、外国語学部(376名)で合計10,683名の学生が在籍している(大学院を含む)。教員数は696名(兼任も含め)で、単純計算すると教員一人あたりの学生数は約15名ということになる。なお職員数は194名である。

デザイン芸術学部はさらに、工業デザイン学科、ビジュアルデザイン学科、空間デザイン学科、



造形芸術学科の4つの学科に分かれる。われわれは造形芸術学科講師の顧君琪女史から造形芸術学科の教育内容についてお話をうかがうことができた。その内容をまとめると以下のようなになる。

#### 1) 教育目標

いわゆる「美術」教育(絵画、彫塑など)のほか、実用的な目的の「工芸」に携わる人材の育成を目標にしている。

#### 2) 教育の特色

伝統的な訓練のほか、新しい観念である「素描」「造形」「工芸」ならびに、基礎教育を重視している。多様な領域の造形能力の育成に力点を置いたカリキュラムになっており、さまざまな造形分野の創作を行えるように配慮されている。また、国際化にそなえ外国語教育を重視している。

2年次以降は、1 絵画コース、2 彫塑コース、3 工芸コースの3つのコースに分かれて教育を行っている。工芸コースはなかでも人気が高い。



#### 3) 学部のカリキュラム構成

##### a) 共通必修科目

国語、応用文、英語、英語ヒヤリング、生活英語、台湾史、憲法、法学、心理学、コンピュータ概論Ⅰ、軍事教練、体育

##### b) 学部必修科目

英語能力検定、コンピュータ概論Ⅱ、工場実習、芸術概論

##### c) 学科必修科目

造形基礎(一)(二)、素描(一)(二)(三)(四)、総合素材(一)(二)、撮影学、色彩学、西洋美術史(一)(二)、台湾芸術史、現代芸術史、美学概論、芸術哲学概論、テーマ研究(一)(二)、卒業制作(一)(二)

絵画コース：絵画(一)(二)、絵画材料学(一)(二)

彫塑コース：彫塑（一）（二）、彫塑材料学（一）（二）

工芸コース：工芸（一）（二）、工芸材料学（一）（二）

d) 共通選択科目

図学、芸術解剖学、造形原理、撮影学、金属工芸、繊維芸術、陶磁工芸、漆工芸、油絵、水墨画、水彩画、版画、石材芸術、木材芸術、塑造、装置芸術、民俗学、ガラス工芸、芸術評論、文化人類学、研究方法学、コンピュータ芸術、音楽鑑賞など

4) 卒業後の進路

a) 芸術系大学院

造形芸術研究所（国立台南芸術学院など）、美術研究所（国立台湾師範大学など）、応用芸術研究所（国立交通大学など）

b) デザイン研究所

国立成功大学工業デザイン研究所、国立台湾技術学院デザイン研究所など

c) 教職課程の科目をとった上で、教員に進む職種としては、造形芸術創作、応用芸術、工芸、デザイン、造形芸術関係の教師、芸術研究、芸術プロデューサー、文化機関主管、芸術機関行政職などがあげられる。

5) 教員構成（造形芸術学科）

教授 4、助教授 1、講師 13

大葉大学に限ったことではないが、台湾の大学教員は欧米をはじめとする海外の大学で学位を取ることが一般的で、金沢美術工芸大学で修士号を取得した林漢鼎（彫塑）、顧琪君（漆工芸）をはじめ、スタッフのほとんどが外国の大学で博士や修士の学位を取得しており、将来的には造形芸術研究所（大学院）の設置申請を考えているとのことである。<sup>12</sup>



#### 4. 4 台中漆文化博物館

頼高山氏が自宅を改造して作ったもので、台湾の民間における漆工芸教育機関として大きな役割を果たしており、台湾における漆文化の創作研究と発展に寄与するところが大きい。それは同博物館設立の趣旨である「爲臺灣工藝漆工藝立身立命、爲繼往萬世絕學開太平」という台湾の漆芸を継承発展させていくということばに表れている。

同博物館は、単に漆工芸作品を展示しているというだけでなく、漆工芸教育機関としての役割も持っている。そのため、古漆器、台湾早期漆器、大陸漆器、仮面、謝藍（次ページ写真左）、陶漆、漆画といった作品展示コーナーのほかに、漆工芸の各種技法整理コーナー、工程表コーナー、材料・工具展示コーナーが設けられている。なお、同館の管理運営維持に対しては台中市からの補助も受けており、材料費以外の費用は徴収していない。

また最上階の4階は頼高山氏のアトリエになっており、氏の代表作（次ページ写真右）が所狭しと置かれている。同館は、国立台湾伝統芸術センターの委嘱により漆工芸伝習計画を実行するなど、頼高山、頼作明両氏の熱意により運営されており、そこで研鑽を積んだ弟子たちは、たとえば李幸龍氏（1999年日本石川国際漆芸展優秀賞）、陳文濱氏（2000年第5回日本アジア工芸展入選）、陳鏡氏（同前）の様に内外で活躍している。



#### 4. 5 国立台湾工芸研究所

台湾中部の南投県草屯に位置する国立台湾工芸研究所は、その前身をたどると、日本統治時代の1935年に設立された「竹材工芸伝習所」までさかのぼる。南投県には竹材、木材、籐など工芸材料が豊富で、その地特有の加工技術が広く浸透しており、農村経済の活性化を促す目的で同伝習所が設立された。その後1954年7月に「南投県工芸研究班」が、台湾における初めての組織的な工芸研究機関として設立され、1959年には南投県政府に属する「南投県工芸研修所」に



組織が再編された。1973年には国立の「台湾省手工業研究所」として建設庁の所属になり、さらに、1999年7月1日に現在の「国立台湾工芸研究所」に改名された。「南投県工芸研究班」時代には17歳以上の男女100名に対して、木工、竹工、織物、彫刻、籐工などの訓練を行ったという。現在「国立台湾工芸研究所」となり、台湾における工芸産業の発展に資するための工芸訓練機関という基本的な設立の趣旨は保持されているが、産業としての新しい工芸品の開発研究や海外からの研修生の受け入れなど、研究所の活動は拡大しつつある。

同研究所で漆工芸の講習が行われるようになったのは、最近のことである。前述の王清霜氏は「南投県工芸研究班」時代には教務主任を勤めるなど、同研究所とは深くかかわっていたが、その当時は漆工芸に関する研修は行っておらず、「台湾手工業研究所」時代の1996年になって、はじめて「夏期技芸訓練研習班漆芸科」の講師をつとめている。「国立

台湾工芸研究所」となった後の2002年にも80歳の高齢にもかかわらず、「蒔絵技法研習」の講師を務めている。われわれが同研究所を訪れた際に見せてもらった受講生の作品（前ページ写真上。写真下は王清霜氏の作品）はそのときのものである。教室には日本における伝統工芸の大きなポスターが貼られ、受講生との話からは、日本の伝統工芸に対する強い関心が感じられ、中には安代町漆芸研究所（山形県）で研修を積んだ者も数名いる。

## 5 台湾漆工芸の技法に関する調査

現在使われている台湾漆芸の主な技法は、木胎、陶胎、金胎、縄胎、乾漆。加飾については、頼作明氏の記述に依ると蒔絵、螺鈿、卵殻、平文、平脱、描金肇、彫漆、漆絵、そのほか無限とあるが、前述の、頼高山氏、王清霜氏によって伝達されているのであろう。今回の調査は結果から言うと、一番に心を引かれ感銘を受けたのは、大葉大学や、工芸研究所で、元気の良い女性の教官たちに会えたことであった。彼女たちは金沢美大に留学していたので日本語も達者で親日家であった。大葉大学では、工芸コースの中では漆専攻希望者が多く、今年度は28人にもものほり、面接の結果8人になったそうである。教室も設備も本学より広く充実していて、天井が高く、明るい自然光のなかで制作ができ、また教官の部屋も個室で、素晴らしい環境であった。しかし教科の内容に関しては、材料はほとんど日本から取り寄せており、技術のレパトリーも我が高岡短大の方が広いように思える。そして頼作明氏の教え子たちの工房を訪ね、取材が出来たことも大きな収穫の一つである。陶芸の産地台中が中心であったため、その多くが陶胎漆器であり、一部に漆を焼きつけ、卵殻や蒔絵を施したものに漆を何回も塗り重ね、研ぎ出した変わり塗など、技法が主体ではなく、自己表現の手段として扱われていた。30代から40代始めの若手の作家たちが夫々工房を持ち、そこには家族ともどもほのほのとした暮らしがあり、一様に明るく心豊かな表情にはほっとするものがあった。彼らは目を輝かせて、自分の作品について語り、誇りと情熱が自然に伝ってくる。みな教育機関を経たあと、いったん然るべきところに就職をし、何年か働いて基盤を作り、作家活動で生計をたてている。目的を達成するまで、じっくり時間をかけているので、作品も、腕も確かであった。今回は7名の作家の工房と暮らしを垣間見たに過ぎないが、ここに卒直な感想を述べさせていただく。

### 1) 謝怡音。彰化県田尾郷在住。国立北斗家商広告設計科講師。

輔仁大学応用美術学部卒業後、彰化師範大学およびオハイオ州立大学でともに教育学修士を取得。台中郊外地震のあと建てられた新興住宅の一角に住居兼工房を構えている。工学系出身の高校教師の夫と娘二人の4人家族。マンション風に見えるがフロアが縦サイズで、10坪足らずの



1階が応接間、2～3階が住居、4階が工房、階段には彼女の大小の額がかかっていた。漆絵で、台湾の風景、古民家、花をモチーフにしている。一見油彩に見えるが、漆の顔料を練り合わせている。確かな描写力で、柔らかな優しい色調から、彼女の穏やかな性格がうかがえる。裏庭には小さな野菜畑があり、近くの花市場に案内される。そこは濃い赤やピンクの南国の色彩があふれていた。

2) 陳文濱。1964年生まれ。台中県梧棲鎮在住。

大通りに面した角に店兼工房があり、細長い店のすぐ横が工房になっている。弁柄や黄土の焼き閉めの茶道具が並んでいたが、急須や湯のみに巧みに細字が刻んであり、形も洗練されている。大きな展示ケースには壺があり、薄肉状に仏像が彫られたベースに、漆を数回塗り重ね研ぎ出す陶胎漆器であった。仕事をしながら接客もするので、工房は何処もそうであったが、お茶の用意がしてあり、目の前で入れながら話をする。



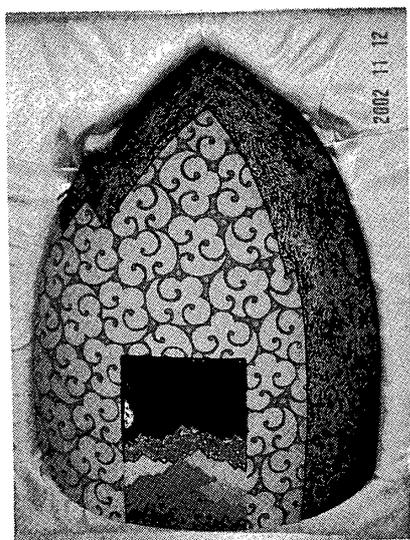
3) 陳鏡、吳淑桜夫妻。台中県梧棲鎮在住。

大通りから500メートルぐらい路地を入った所に、鉄工場をそのまま利用した陶芸の工房があった。鍵の手になっていて手前の長屋が住居、珍しい草花の鉢植えが幾つか置いてあり、ほのぼのとして心が和む。可愛らしい女の子が親の後ろに隠れていたのも微笑ましかった。生業は陶芸らしく、棚が沢山あり小さな湯のみやコップが所狭しと並んでいる。沫茶茶碗もあり名古屋で個展をする予定があるとか。ご主人の方は日本の公募展にも出品。奥さんは生活工芸ながら、コップやポットに童画風の文様を線彫りしたあと、漆で焼き付け塗装をして研ぎ出すという中々楽しい作品であった。



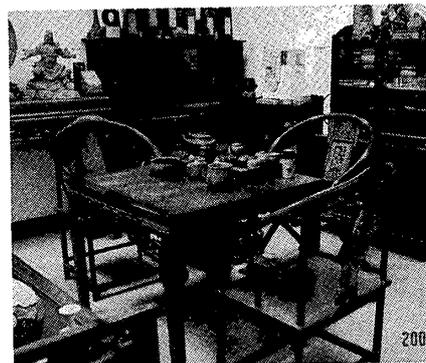
4) 李幸龍。1964年生まれ。台中県清水鎮在住。

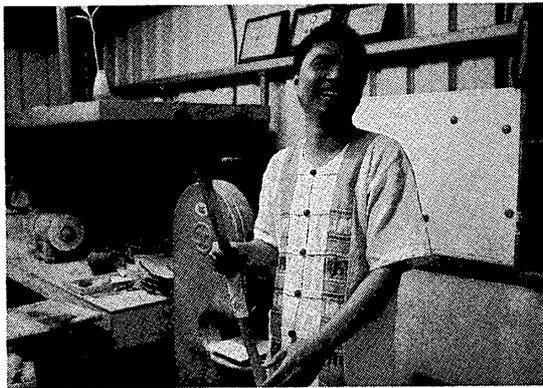
街を離れた畑の中に瀟洒な3階建てのビルが3棟、庭を囲むように建つ。1棟は工房、住居、



ショールーム。台湾で今一番の売れっ子作家のようで、やはり陶胎で花や螺旋、唐草文様の一部に漆を焼き付け蒔絵が施されている大きな壺が沢山あった。奥さんと、中学生ぐらいの男の子が二人、弟子がいないにしては仕事場の規模も、作品の数も大がかり。ショールームには、大きな骨董家具や調度品が配され小さな資料館なみで、仏像や生活用品など、コレクターとしての目も高い。住居にはワインバーやカラオケセットまであり、日本の若手作家と比べると、うらやましい環境である。しかし台湾もバブルが去り、売れ行きも

一頃ほどではないとも言っていたが、この作家の可能性と自信を秘めた表情が印象的であった。





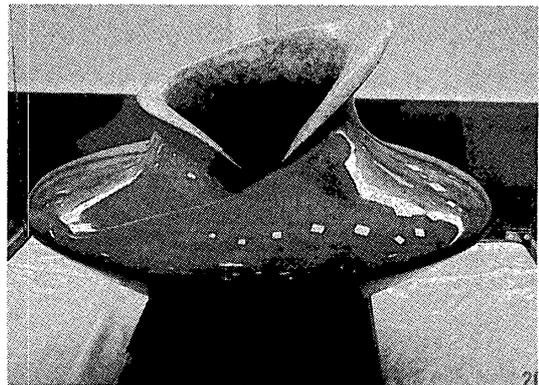
5) 陳振芳。1968年生まれ。新竹市在住。

台湾螺鈿作家。始めに訪ねた女性漆芸家の家に似ていて、やはり4階が工房になっていた。3階の上に付け足した感じで、コンクリートの床には原貝がごろごろ入った木箱が十数個あった。これを糸鋸やレーザー光線で挽き、グラインダーで摩り下ろすところからやるそうで、約1.5ミリに摩り下ろした貝を数十枚、あるいは百枚以上をジグソーパズルのように隙間なく貼り合わせる。仏像や鳥のパネルが

1階のゲストルームに架かっていたが、それは鮮明に輝き、落ち着いた心地良い作品であった。ここにも父親そっくりの10歳ぐらいの男の子がいて、もう夜9時を過ぎていたが私たちを歓迎してくれた。

6) 彭坤炎。新竹市在住。

1998年新竹市における「中日漆芸交流展」に尽力された作家。折りしも、大華技術学院のホールで個展開催中、70点の力作が並び盛観であった。14歳の時から通学しながら唐木家具の摺り漆の仕事を始め漆芸の道に入るが、堆漆、乾漆など伝統的な技法を自ら試みながら、近代彫刻の概念に基き創作の美を追求している。麻を貼り合わせた素地に、下地をして、肌を整えてから、幾重にも漆を塗り重ね研ぎつける。金や銀粉、卵殻、箔、貝を施して造られた作品については、専門外なので一口では言えないが、日本語で話をするのができ、ひたむきに、漆芸を独自に追求している姿勢に好感が持てた。



7) 江添昌。南投県在住。

元軍人だが、訓練中の事故により下半身不随になり車椅子の生活を余儀なくされた。現在は経済部(日本の経済産業省に相当)中部弁公室に勤務しているが、失意のどん底にあったときに、頼高山、頼作明両氏にめぐりあい、漆芸を学んだ。江氏によれば、漆芸を学ぶことで、生きる力を与えられたという。作品は陶胎の壺、黒、朱の地色に卵殻で鳳凰や竹等一見古典的であるが、研ぎ澄まされた感性がうかがわれた。



## 6 結 び

『清代漆芸文物特展-附展台湾早期漆芸』によると、台湾の漆工芸には日本統治時代の影が色濃く残っているという。台湾における漆芸の技は頼高山氏や王清霜氏のように、当時の日本の漆芸教育を受けた世代を第一世代とし、頼作明氏を代表とする第二世代を経て、台湾の漆工芸は第

三代に継承されつつある。しかし、それは日本の漆芸を模倣するというだけではなく、李幸龍氏、陳鏡氏、陳文濱氏のように、台湾の伝統的工芸である陶器の特色を生かしたオリジナルなものを追求しようとしている。頼作明氏も陶胎漆器を「漆陶」と呼び、そこに台湾漆芸のオリジナリティーを見出そうとしている。<sup>13</sup>

訪問した先々で高岡短大の学生の卒業制作の図録を進呈したが、そのたびに一様に「2年間でここまでの技をどうすれば身につけることができるのか」と賞賛と驚きの声が聞かれ、指導方法について詳細に質問され、改めて高岡短期大学の漆工芸教育の水準の高さを再確認することになった。大学が個性化していく時代の流れにあって、大学が現在持っている教育水準の高い分野の維持発展が可能な教育体制であることこそ、時代の流れに即したものであろう。

### 注釈

- <sup>1</sup> 本調査は平成14年度学長裁量経費によるものである。
- <sup>2</sup> 「学院」は日本の大学院に相当する。
- <sup>3</sup> 元来、中原（黄河流域）に居住していたが、戦乱などにより、次第に南方中国に移住していった漢民族の一派で、漢民族の伝統的な生活習慣を保っているといわれる。客家人の特性として、家庭・社会における女性の能力と地位の高さ、勤勉さと清潔さ、冒険と進取の気性、儉約と質実、多角経営と人材の育成などがあげられる。孫文、鄧小平、李光耀（リー・クワンユー）といったリーダーはいずれも客家人である。
- <sup>4</sup> 谷豊信「漆で描かれた神秘の世界—湖北省出土品を中心に見た中国古代の漆器—」『漆で描かれた神秘の世界 中国古代漆器展』所収。東京国立博物館編集、トヨタ財団1998年発行
- <sup>5</sup> 中国最古の歌謡集（合計305篇）で、BC600年ころに編纂された。
- <sup>6</sup> 後漢（25年—220年）の許慎（147年ころ死去）による部首別配列の中国最初の字書。9,353字を540部に収めている。
- <sup>7</sup> もとの名は『尚書』で、西周時代から春秋戦国時代にかけての王室の公文書や君臣対話を整理したものの。
- <sup>8</sup> 戦国時代の哲学者で『莊子』の著者。
- <sup>9</sup> 戦国時代から前漢にかけて編纂された古代中国の地理と博物学の著作。
- <sup>10</sup> 主に莊伯和「台湾漆芸發展與生活」（『清代漆芸文物特展—附展台湾早期漆芸』所収、中華民國1997年、国立歴史博物館出版）による。
- <sup>11</sup> 1947年2月28日に起こった、国民党に対する台湾人の武装決起。ここに、本省人（台湾人）と外省人（中国人）との角逐が始まった。
- <sup>12</sup> 眞武薫氏（台湾国立清華大学外国語学部講師）によれば、教員のほとんどがアメリカで学位を取得している清華大学においては、教官会議はすべて英語で行われるという。
- <sup>13</sup> 李幸龍氏、陳鏡氏、陳文濱氏が、頼作明氏のことを中国語で“老師”と呼び、頼高山氏のことは「センセイ」と日本語式の発音で呼んでいたが、これは頼高山氏が北京語を解さないということだけの理由からではなく、二人の師に対する尊称の使い分けとして語学的に興味深い。

**参考文献**

- 1 索予明著『漆藝鑑賞－古老的精密工業』行政院文化建設委員会発行、1987年
- 2 沈福文編著『中国漆芸美術史』人民美術出版社、1992年
- 3 莊伯和著「台湾漆芸發展與生活」『清代漆芸文物特展－附展台湾早期漆芸』、1997年5月、國立歷史博物館出版
- 4 國立傳統藝術中心籌備處編『賴高山 漆工藝脱胎立體作品集』、1998年
- 5 東京国立博物館編集『漆で描かれた神秘の世界 中国古代漆器展』トヨタ財団、1998年
- 6 國立臺灣工藝研究所編『王清霜漆藝創作80回顧』、2001年

## A Short Report on the Urushiwork(Lacquerware) in Taiwan

Hiroko NEMOTO, Shinichi YAMADA

### ABSTRACT

This is a short report on the urushiwork in Taiwan. This report is divided two parts. One is about the history and the present condition of the urushiwork in Taiwan, from an educational point of view. The other is about the technique of the urushiwork through the young artists. Historically, the urushiwork in Taiwan was under the influence of mainland China *Fuzhou*. However, after the 1920's the urushiwork in Japan had a great influence on its practice in Taiwan. The technique used in urushiwork was brought to Taiwan by *Lai Gaoshan and Wang QingShuang*, who studied in Tokyo Arts School before the second world war. Now, we can see new developments and trends in the urushiwork in Taiwan, such as the confluence of the urushiwork with Taiwanese traditional craft pottery.

### KEY WORDS

Taiwan, urushiwork , traditional craft , pottery, *Lai Gaoshan, Wang Qingshuang*